

エロゲー エロゲー!

NEW EROTIC GAME!

竹内けい

【キャラクター原案】kanata

【挿絵】羽霜ゆき

立ち読み版



NEW EROTIC GAME! CHARACTERS

かみ く ひ えん
神喰飛燕

桜華の神託により村人から勇者になった青年。



すめらぎ おう か
皇桜華

冒険にも同行するアクティブなお姫様。
回復魔法が得意でパーティの立派な戦力の一人だった。
ドレスを变形した衣装からむっちりエロい身体を見せる。

くれない すざく

紅朱雀

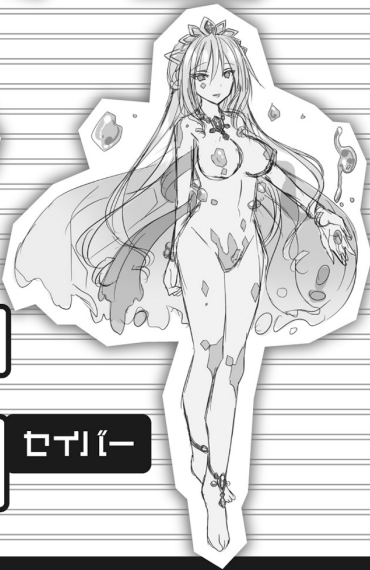
魔王四天王の紅一点。冷酷非情で
実力も魔王に次ぐナンバー2。
軍の中でもカリスマ的に人気を誇る。



げっか ふ よう

月下芙蓉

魔法の達人として知られた誇り高いエルフ。
桜華の姉のような存在で大臣の地位にある。



剣の精霊。前の世界では飛燕に
最後まで付き添った相棒。
精霊だが人間に似た姿になれる。

セラー

| | |
|-----|-----------|
| 第一章 | いきなり最終決戦 |
| 第二章 | 強くてニューゲーム |
| 第三章 | 剣の精霊 |
| 第四章 | 百万の魔物 |
| 第五章 | 時を駆ける愛 |
| 第六章 | ハッピーエンド |

「芙蓉お姉さまもやられたのですか？ 勇者さまにあのようなことを」

桜華の若干、険のある物言いにたじろぎながらも芙蓉は頷く。

「それは……はい」

「へえ」。精霊さまに比べるとお姉さまは……」

超絶巨乳のセイバーに対して、肉付きの薄い芙蓉の乳房は、人間の標準以下である。桜華の視線の言わんとすることを察して、芙蓉は慌てて自らの乳房を腕で覆う。

「大きさと感度は関係ありませんから。いや、むしろ小さい方が感度は優れているという話もあるくらいで……」

「へえ」

芙蓉が飛燕のお手付きとなつてからというもの、ときどき桜華は芙蓉にとっても冷たい眼差しを送ることがある。

そんなギスギスしている桜華と芙蓉の見守る中、空中で晒し者になっていたセイバーの内腿は、いつしか線ではなく、面でテラテラと濡れ輝いていた。

「ああ、もうらめえええ」

誇り高き古の精霊も、執拗な乳首扱きには耐えられず、空中で逞しい脚をじたばたさせたかと思うと、絶頂してしまった。

身体が弛緩し、魔力も途切れたのだろう。セイバーは空中から落下しそうになったが、

背後から抱きしめていた飛燕がゆっくりと水面に下ろしてやる。

小さな湖に浮かんだセイバーは不意に振り向くと、飛燕と対面となり、両腕で飛燕の頭を抱くと唇をかさねてきた。

「うむ、ふむ……、うむ」

唇を押し付け合うだけでは飽き足らず、舌を絡め、唾液を交換し合う。巨大な乳房が飛燕の胸に押し付けられる。

「ふう……」

情熱的な接吻を終えたところで、飛燕は苦笑する。

「ずいぶんと積極的になったな」

「強い男を主とする。それはわらわの夢じゃった。おぬしならばわらわを存分に楽しませてくれよう」

「ああ、期待は裏切らないぜ」

嘯いた飛燕は、セイバーを水面にうつ伏せにして、むっちりとした尻を抱えあげると、股間を覆っていた前張りをペリペリと剥がす。

「おまえの恰好は脱がす手間がかからなくていいな」

青い菊華状の肛門があらわとなった。精霊も排泄するか、と不思議な気分になる。

そのくせ陰毛はまったくなかった。ツルツルの肉割れの左右に親指をかけて、陰唇をく

ぱつと開く。

「オマ○コも青いんだな」

水色の肌よりも濃い、青い粘膜に、大粒のクリトリス、ヒクヒクしている膣孔といったものが露呈する。

「萎えたのならやめるとよい……」

「いや、色が違うっただけで、形状は普通のオマ○コだ。これならできるだろう。ぜひやらせてもらう」

もちろん、精霊とやるのは初めてだから好奇心を刺激される。しかし、それ以上にセイバーはかつての仲間だ。

相手は知らぬとはいえ、飛燕から見ると、非常に身近な存在である。

「美味そうなオマ○コだ」

尻を抱えた飛燕は、湖に半身を沈めた状態で、陰唇にしゃぶりついた。

「あん、そのような場所を、ああ、ああ、ああ……」

早くも精神的に屈服してしまったのか、セイバーは逃げるそぶりもなく、頬を染め、気持よさそうに喘ぐ。

見守る桜華と芙蓉のほうが、見てはいけないものを見てしまったような気まずさで、モジモジしている。

(多少しよっぱくてすっぱい。オマ○コの味は人間もエルフも精霊もたいしてかわらないな)

存分に舐め穿り、膺孔もえぐって楽しんだところで、口を離れた飛燕は立ち上がった。

「はあ……、はあ……、はあ……」

湖にうつ伏せになり、尻を高く突き出した姿のセイバーは、後ろ目に媚びるような視線を送ってくる。

「それじゃ、そろそろ入れるぜ」

飛燕はズボンの中からいきり立つ逸物を取り出す。

「キヤッ」

思わず悲鳴を上げたのは桜華であった。

赤面した桜華は、慌てて両手で顔を覆ったが、そのくせ指の狭間からしつかり観察する。

「ドキドキ、さすが勇者さま大きいです」

「姫様、声に出ていますよ」

見かねた芙蓉が窘める。

そんな外野のやり取りは無視して、飛燕は宣言する。

「これから入れるぞ。これをもって俺とおまえの契約とする。いいなセイバー」

「しよ、承知した……いや、ちょ、ちよつと、まて、わらわはこういうことは初めてで……」

…

「まあ、そうだろうな」

前回のときにも、セイバーに異性の臭いはしなかった。

ためにに膣孔に人差し指と中指を入れるが、処女膜の抵抗はない。

「あはあん……」

「安心しろ。おまえは俺の剣だ。優しくしてやるよ」

エルフとは逆に、精霊には処女膜がないようである。

クチュリクチュリ……。

二指をよじつて、膣孔をほぐす。

（うわ、指に絡み付いてきやがる。こんなのにちんちんを入れたら最後、絞りつくされるな）

思わず生唾を飲みながら、飛燕は指を引き抜いた。

そして、セイバーの充実した水色の尻を両手で捕まえると、濡れ緩んだ膣孔に逸物の切っ先を添える。

「では、いくぞ」

ぐいっと押し込んだ。

ズボッ！

「……はあくん♪」

充実した裸体を弓なりにして、セイバーは快感の声を上げる。

「い、入れてしまった……あんな大きいのが……根元まですっぱり」

桜華は顔を両手で覆うのも忘れて、両手を握りしめて、食い入るように魅入る。

「おお、ヤワヤワとしていながら、この絡み付くような締めつけ、さすがにいいオマ○コしているぜ」

「おお、わらわはおぬし、いや、主殿のものじゃ」

「いやいや、ここからだぜ」

猛った飛燕は、そのまま腰を使い始める。

ズコ、ズコ、ズコ、ズコ！

「はあん♪ あん♪ あん♪ あん♪」

処女膜がないおかげで、破瓜の痛みもなく、女の歓びがすぐにわき上がってきたようだ。神秘的な森の奥にある神聖なる泉にて、古の精霊は獣のように四つん這いになり、嬌声を張り上げる。

「古の精霊すらも犯すとはなんという性獣」

憤慨する芙蓉とは反対に、桜華は興味津々で見つめながら、指を咥えてポツリと呟く。

「いいなあ……」

「ひ、姫様……」

「な、なんでもありません」

桜華は慌てて誤魔化す。

「そ、そんなことよりも、精霊も生殖行為をできるのですね。知りませんでした」

「精霊と人間との間に、ハーフが産まれたという話も古来あります。よって生殖行為も可能なのでしょう」

芙蓉は冷静に解説しながらも芙蓉の下半身では、内腿を切なげに擦り合わされていた。

「どうだった？ 俺はおまえの剣の主として相応しいだろ」

「うむ、初めてなのに初めてという気がせん。さながら前世からの契りを感じるぞよ」

「そうか、それはよかった。俺もだ」

セイバーが飲んでいることに、飛燕もまた嬉しかった。

（痛くないなら、いろいろと試してみるか？）

長年の相棒と結ばれたのである。飛燕としてはいろいろとサービスしたくなかった。

セイバーの充実した右足を犬が放尿するときのように上げさせて突きまくる。

「おー、おーおー、気持ちいい、気持ちいいのじゃー」

猛った飛燕は、亀頭部で子宮口を打ち砕かんとするかのように激しく腰を動かす。猛った飛燕は、亀頭部で子宮口を打ち砕かんとするかのように激しく腰を動かす。



両手を縛られて地面に腰を下ろす桜華も、また大声で答えた。

意識がしつかりしていることに安堵した飛燕は、改めて蛇破を見る。

「つまり、さつきドラゴンを撃つたのは、おまえってわけか」

「ああ、そうだよ、ようやくわたしの実力のほどがわかったというわけだ」

確かに獲物を持って手が塞がっており、不意打ちだったとはいえ、あのドラゴンを瞬殺して見せたのだ。決して弱くはない。

「ああ、最弱でも四天王だな」

「最弱じゃねえ。それに四天王ではなく、闇の軍勢の総司令官だ」

つまり、桜華が中庭にいて、光り物大好きなドラゴンが拉致したところを、偶然出会わせ、蛇破が横取りした、ということか。

いや、闇の軍勢の総司令官を自認するくらいだから、敵の本拠地を見張っていて、今回のアクシデントに対応できた、と考えるほうが自然だろう。

「ああ、そうだったな。ならお望み通り相手をしてやるぜ」

森の中での人探しよりも、目の前にいる敵を倒すほうが楽である。二人の間を崖が阻んでいるとはいえ、飛燕から見るとないも同じだ。

「ちよつと待て、動くなよ。こつちには人質がいるってことを忘れるなよ」

蛇破が囚われの身の桜華を指し示す。飛燕は思わず溜息をついた。

「おまえ、やることが一々、小物臭いな。さすが四天王最弱」

「わたしは頭脳派なんだよ！」

自分でも卑怯な手という自覚はあるのだろう。蛇破は顔を赤くして叫ぶ。

飛燕から見ると、いつでもぶっ殺せるやつではあるが、なにをやるつもりなのか、多少は気になったので、出方を窺う。

「それでなんだ？ 俺が動かないことで、おまえになにかメリットがあるのか？」

「くつくつくつ、そう焦るなよ。おまえのせいで闇の軍団は大ダメージを受けた。ただで殺したのでは魔王さまの気もおさまるまい。おまえには散々に苦しんでもらうぞ」

蛇破は気取った仕草で指を鳴らした。

すると桜華の両手を縛った綱を伝って、とろとろと何かが下りてきた。

「なっ！」

「ひい！」

その粘液はたちまちのうちに桜華の手首に達して、二の腕や頭から全身へと流れ落ちていく。

「な、なにこれ？ いや、ヌルヌルしている!？」

「貴様、なにをした!？」

悶絶する桜華のさまに焦った飛燕が怒声を上げ、蛇破は余裕の態度で応じる。

「なーに安心しろ。ただのスライムだ」

「スライムだと……?」

戸惑う飛燕に、蛇破は得意げに説明する。

「スライムというのは、ゴレムやキメラと並ぶ魔法科学の一大テーマだ。古来、いかに女を辱める生態に変化させるか試行錯誤が繰り返されてきた。このスライムはわたしの作った傑作。決して女体を傷付けることはないが、くくく。極上の辱しめを与えることができる」

「おいおい」

悦にいる蛇破に呆れた飛燕は、その言葉の真偽を確かめるべく桜華を注視する。

たしかに、蛇破が自信たっぷりに宣言した通り、半透明の粘液は桜華の全身に付着したが、危害を加えているようには見えない。

むしろ、半透明の液体はキラキラしており、美しいとさえいえたと。

「つ、冷たい」

無駄に色っぽく悲痛な声を上げる桜華に、蛇破は嗤う。

「冷たいのは初めだけだ。すぐにおまえの体温を吸って人肌に温かくなる」

「あああ……」

両腕を吊るし上げられて、膝立ちになっている桜華は、色っぽくのけぞった。

「ゴクリ」

もともと清纯派な顔とは裏腹な、過剰なまでの我儘ボディである。

それがスライムにまとり付かれて悶えるさまは、なんともいえず色っぽい。

「うひょひょひょ♪ おまえの大事な姫様が、スライムに辱しめられるさまをよく見ておく方がいい」

テンションが上がっているのだろう。蛇破は変な笑い声を上げて得意満面だ。

「スライム責めとはまた、エライマニアックなことを……」

呆れながらも、飛燕もまたつつい魅力入ってしまったのは、男の悲しい性癖である。

桜華の肢体にまとり付いたスライムは、たしかに桜華には危害を加えていない。しかし、衣服は例外らしい。

纏っている白いドレスがみるみるうちに溶けていき、中から純白の下着姿があらわとなつた。

純白のブラジャーとショーツ、ガーターベルトとストッキングだ。

「ああ……」

下着姿となってしまった桜華は、男たちの視線を避けようと必死に膝を曲げて閉じようとす。

しかし、ドレスの生地を溶かす生物である。より柔らかな素材で作られた下着など、瞬

くまに溶かしていく。

半溶けの下着姿というのは、下手な裸体よりも淫らだ。

「ああ……ダメ、勇者さまの前でこのようなことを……ああ、ウソ、やだ。なにこのスライム、イヤらしい」

「うひょひょひょひょ、だからそれは天才魔道科学者たるわたしが培養した特別製のスライムですよ。女の夜の友としての機能は完璧です」

どうやら、スライムのやつはけしからんことに、下着を溶かしきる前に入って乳首やら陰部やらを刺激しているようである。

「あ、そこは、そこは、あん、そんなところまで……もう、ダメ……」

あまりの色つばさに、飛燕は思わず見惚れてしまった。

実際、横から見る蛇破よりも、正面から見る飛燕のほうが特等席である。

「うひょひょひょ、どうです、人ならざる魔道生物によって強制的に感じさせられる気分は？」

「うん、もう、もう、いや……」

スライムに全身を弄ばれ桜華は、ついには絶頂してしまったようである。

「……はっ!? いかん! ついつい魅入ってしまった」

我に返った飛燕は頭を振る。

「うひよひよひよひよ、さすが篁の国の秘宝と称えられる巫女王たりますな。素晴らしい身体をお持ちだ」

邪破はもはや我慢できないとばかりに、両手を股間に持っていく。

そして、いきり立つ逸物を取り出しながら、対岸の飛燕を牽制する。

「うひよひよひよひよ、なにもできぬ己が身が悔しかろう。そこで巫女王が陵辱されるさまを指を啜えて見ている、ぐげっ！」

ドゲシ！

蛇破が逸物を取り出す前に決着が付いていた。

紅孔雀でさえ対応できなかった超スピードで間合いを詰めた飛燕が、蹴りを一発お見舞いしたのだ。

盛大にぶっ飛んだ蛇破は、山肌に激突したあと、反動で戻り、そのまま崖下へと落ちていった。

「まったく、最弱の男が俺に勝てるはずないだろ」

崖下を一瞥してから悪態をついた飛燕は振り返り、両手を吊るし上げられ、スライムに弄ばれている桜華のもとに駆け付ける。

「勇者さま、必ず助けにきてくださると信じておりました」

「遅くなつてすまない、うっ」

改めて間近に桜華の姿を見た飛燕は、絶句した。

スライムが、下着類にいたるまで捕食を終えてしまっていたのだ。

赤ん坊のようにむちつとした乳白色の肌に、ピンク色の乳首や、黒々とした陰毛はよく映える。

そのうえに半透明の粘液だけがかかっているさまは、もはや存在自体が猥褻物^{わいせつぶつ}だ。

直視することを躊躇いながら、飛燕は吊るし上げられた桜華の両腕の綱を解いてやる。

「あ、ありがとうございます」

自由を回復した桜華は、慌てて左腕で胸元を隠し、右手で股間を隠す。

そんな恥じ入る姿がなんとも色っぽい。

「はああん、ス、スライムが……」

スライムを抱きしめた形の桜華は色っぽいけぞった。

魔道生物に身体をまさぐられるなど、やられてる女にしてみれば拷問である。しかし、その清纯そうな顔とは裏腹なムチムチボディに、半透明な粘液がまとわりついてるさまは犯罪的な艶やかさだ。

思わずゴクリと喉を鳴らしてしまった飛燕だが、満腔の自制心を維持しつつ命じる。

「いまとってやる。その……手をどける」

「は、はい……」



「まったくおまえらは……」

射精を終えて人心地ついた飛燕は、湯船の中で仁王立ちをし、怒りを抑えるように閉じた臉をピクピクと痙攣させる。

「今日は休ませてくれるんじゃないのか？」

「このようないい女たちが発情しているのに、ぐうぐう寝ている男のほうが悪い」
水色の肌の精霊セイバーは悪びれない。

「申し訳ありません。その勇者さまのお姿を拝見していたら、ついムラムラと」

清纯派な顔とは裏腹なムチムチボディを小さくして、桜華は一応謝罪する。

「あたいはおまえの牝犬だからな」

闇の住人たちのカリスマ紅孔雀は、クールな表情で指に掬った精液の残滓を舐める。

「わたくしとしたことが……」

堅物で知られた眼鏡のエルフ芙蓉は、恥じ入ってみるが、内腿をモゾモゾさせているあたり、説得力はない。

「ああ、わかった。やってやるよ。おまえら、全員、壁に手を突いて尻を差し出せ。そしてオマ○コを開け」

怒りに任せた飛燕の横暴な命令に、女たちは嬉々として従った。

みな風呂場の壁に左手を突くと、右手を股の間に入れて、陰唇を開く。

「お好きなところへ、どうぞ」

飛燕の眼前で左からセイバー、紅孔雀、桜華、芙蓉という四つの尻が並ぶ。

バインと左右に張った水色のデカ尻がセイバー、パンツと張りつめた褐色の尻が紅孔雀、白くて柔らかそうな尻が桜華、白蠟のような冷たくすつきりとした小尻が芙蓉だ。

いずれの陰唇も綺麗に花開き、蜜を滴らせている。

そんな淫らな花園を前にしたら、男の怒りなど雲散霧消してしまう。

いきり立つ逸物を持った飛燕は、美しくも淫らな花に近づいていく。

「さてと、どいつから入れてやろうか？」

いずれの陰唇も、見ているほうが恥ずかしいほどによく濡れている。

自分たちで散々前戯をやっており、発情しきっていることは容易に想像が付く。

(まあ、こういうときは思いつきり焦らしてやるのが礼儀つものだよな)

舌舐めずりをした飛燕は、いきり立つ逸物をまずセイバーのデカ尻の左の肉朶に添えた。そこから右へと一気に移動させる。

ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポン！

セイバーの左の尻朶から、右の尻朶にあたり、紅孔雀の左の尻朶、右の尻朶、桜華の左の尻朶、右の尻朶、芙蓉の左の尻朶、右の尻朶と谷間ごとに逸物は跳ねていった。

「ああん♪」

女たちは切なげに尻をくねらせる。

その痴態に微笑しながら、飛燕はさらに右から左へと逸物を振るった。

ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポン、ポンッ！

芙蓉の右の尻朶から、左の尻朶にあたり、桜華の右の尻朶、左の尻朶、紅孔雀の右の尻朶、左の尻朶、セイバーの右の尻朶、左の尻朶と谷間ごとに逸物は跳ねていった。

「はぁん♪」

女たちの尻から背中にかけて、ピクピクと震える。

「ああん、勇者さま、ここにいたって焦らすなんて酷いですう」

悶絶する桜華に、飛燕は冷たく応じる。

「酷いのはおまえたちだろ。疲れている男に無理やりセックスを強要しているんだぞ」

「そ、それはそうなんですけど……」

恥じ入る桜華の横で、紅孔雀は壁にへばり付いたまま反り返り、天井に向かって叫ぶ。

「お怒りはごもつとも。しかし、あたいはダーリンのチンポ奴隷。罰としてダーリンのお

ちんちんに滅茶苦茶にして欲しいです！」

そのさまに隣のセイバーが呆れる。

「おぬし、ほんとドエムじゃの」

「なんのわたくしだって欲しいです。あなたにやられたあの夜から、あなたのおちんちん

なしでは生きられぬ身体になっております」

「まあ、芙蓉お姉さままで。わたくしは子種が欲しゅうございますわ。勇者さまの子供を産ませてくださいませ」

桜華も負けじと開いた陰唇を高く翳す。

そんな光景に、セイバーは尻を突き出したまま器用に肩を竦める。

「まったく、人間もエルフも、好きな男のちんちんの前では変わらぬの。もちろん、精霊として同じこと。わらわは主殿の剣であると同時に、鞘じゃ。たっぷり可愛がつてくれぬと、拗ねるぞ」

「少しは反省するかと思つたが、結局、おねだりか」

処置なしと言いたげに苦笑した飛燕だが、こういうおねだりをされて飲ばない男はいないだろう。ついつい頬がほころんでしまう。

「仕方ないな。いくぞ」

まずは桜華の中に入れる。

「ああ、勇者さま♪」

襷が豊富で、心地良く絡み付いてくる。

間違ひなくだれもが認める名器であろう。この中で思いつきり腰を振りたいという願望は、抑え難いものがあつたが、断腸の思いで引き抜き、左にあつた紅孔雀の中に入れる。

「はあ、ダーリン♪」

キュッキュツとよく締まる膣孔である。一度入れたら抜きたくなくなるような魔性の蜜壺だ。しかし、それを根性で引き抜き、さらに左のセイバーに入れる。

「おお、主殿の肉剣は、まさに名刀じゃ♪」

ギチツと締まる膣孔だ。身体が大きいからだろう、広さと奥行きという意味では、一番である。しかし、だからといって緩いというわけではない。脂が乗り切った魚のように、プリプリとした美味だ。そこから引き抜いて、今度は一番右の芙蓉に入れる。

「陛下♪ 大きい」

細身の芙蓉は、膣孔もまた細い。逸物で膣孔が裂けてしまわないか、と心配になるほどに広がる。そこを滅茶苦茶にしてやりたい、という破壊欲求を我慢して、再び桜華に戻る。四つの蜜壺を順番に犯す、利き酒ならぬ利きオマ○コだ。

（くう、どのオマ○コも気持ちいい♪）

飛燕は多幸感に酔いしれた。とりあえず五巡したところで、飛燕はこの多穴突きが面倒臭くなってきた。

「くっ、今日のところは桜華の中に出すぞ」

「えー」

残された三人の女たちは不満の声を上げる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は18禁未満の方購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!